

日本クリニカルパス学会新理事長ご挨拶

一般社団法人日本クリニカルパス学会理事長 勝尾信一
(つくし野病院)



理事長就任にあたり、過去にしばしば語られてきた質問に対する私の思いを書きます。

・日本にクリニカルパスは必要か？

米国で1980年代にDRG/PPS対策として開発されたクリニカルパスが、1990年代に日本に導入され2000年代初頭は一種のブームのようでした。多職種で一緒に活動する点に放課後のクラブ活動的な雰囲気があったのかもしれませんが、イラストを用いて患者用パスを作ることが楽しかったのかもしれませんが。インフォームドコンセント充実といった社会的な背景も後押ししていました。

その後、2003年にDPC制度（現DPC/PDPS）が開始されてDPCで生き残るためにはパスが必須という雰囲気が生まれ、2006年の診療報酬改定では地域連携パスが搭載されて急性期病院以外の病院にもパスという言葉が広まり、同年のがん診療連携拠点病院の要件にパスが記載されてパスになじみのなかった大学病院にパスが必要になり、とにかく診療報酬獲得のためのツールとして拡がりました。

この間に広まっていったのが電子カルテです。多くのベンダーはパスの機能を装備しました。しかし、その機能はオーダリングを発展させた感が拭えず、単なる便利ツールになってしまいました。パス機能を持った電子カルテの病院に入職した新人は、当たり前のように何となく使っています。

このように、パスはツールとして普及してきましたが、医療の質の向上という本質が置き去りにされてきています。医師・看護師等の国家試験問題にもパスが入ってきていますが、系統だった卒前教育がされているという話はほとんど聞きません。

ではパスは要らないか？

パスがなくても診療は出来るけど、あれば収入も増えるし業務が楽、というだけでは宝の持ち腐れです。パスの持っている能力、すなわちアウトカムとプロセスの両面から医療の質を向上させることを使わない手はありません。

パスは必要だし、正しく作って使って見直すことが重要です。

・日本クリニカルパス学会は必要か？

1999年に本学会が設立し、当初はパスの普及に努めてきました。そして、それなりにパスは普及しました。

それぞれの病院が、診療報酬獲得のためであれ、便利ツールとしてであれ、目的に合わせたパスの運用がなされれば、その病院としては満足でしょう。個人的にパスの勉強をしたいなら、他のいろいろな学会でもパスは取り上げられていますし、Webでも直ぐに見つかりますし、書籍も数多く発刊されています。年に1回各地で開催される学術集会に行くのが楽しみなのは皆さん共通の思いでしょうが、それだけのために学会があるわけではありません。

では本学会は要らないか？

パスが医療の質を向上させるツールだとしても、個々の施設でその証明をすることは困難です。個人でパスの勉強をするのは非効率的ですし、Webや書籍に現れないような先人の知恵やコツを知ることはできません。そして何よりも、パスを好きな皆さんが医療の質の向上にかけるモチベーションを維持するには、心の通う友人作りが必要です。これらを解決する場として、学会が必要と考えています。単なる仲良し会ではなく、皆さんの期待に応えられるような学会運営をしていきたいと思えます。

「パスどおりに理事長を退任しました」

前理事長 山中英治
(若草第一病院)



もし学会理事長のパスがあったら、何とかパスどおりに退任しました。任期中にパンデミックという「社会的要因」の想定外の「バリエーション」がありましたが、何とかパスから逸脱せずすみしました。もうお忘れかもしれませんが、このバリエーションでは集団感染防止のために「密を避ける」ことが求められました。すなわち集まれないので、学術集会在軒並み中止になりました。複数人での会食も禁止でしたので、宴会好きの私には辛かったです。一方で会議嫌いの私には有難かったです。この「バリエーション分析」の結果、集まるよりも効率的なWEB会議の導入という「改善」ができました。

気力も実行力も無く、浅学菲才でアバウトな私が、理事長不信任決議案を提出されることもなく任期を満了できましたのも、しっかりした副理事長、実行力のある各委員長、きっちりした事務局、そして熱心かつ寛大な会員の皆さんのお陰です。また、年々加齢で厚顔無恥になって理事長講演では好き勝手なことを喋らせてもらい、最近では「講演じゃなくて漫談ですね」というお褒めの言葉も頂けるようになりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。後任は（私と違って）パスを熟知し、（私とまったく違って）パスをこよなく愛する勝尾信一先生なので、会員の皆さんも安心です。

ところで、私も各学会の役員を引退する年齢になりました。辞書によると「引退」とは、「業界の地位から退く、または現役から退くこと」とあります。インタイには「隠退（退隠）」という用語もあって少し意味が異なり、「第一線から身を引き、暇な身分になり、悠々自適に暮らすこと」だそうです。後者は羨ましいですが、私は暇だとダラダラするだけで、休日は掃除の邪魔になると言われますので、とりあえず外出します。「ゆとり教育」の時代に学生だったら、もっとアホになったでしょう。今の「働き方改革」の時代に研修医だったら、仕事はサボって学会発表も論文も皆無だったでしょう。そして、自分が高齢者になった今は「高齢者もできるだけ働きましょう」という、恵まれた「人生のパス」になりました。しかし、自分も高齢になった今、高齢者は自分の衰えを自覚できるうちに、鬱陶しがられる前に、公的な役職は退いた方が良いと思います。

清の時代の中国の袁牧という文人は、漢詩の銷夏詩で「平生自ら想う 無冠の楽しみ」と、官吏を早々に隠退した後の生活の楽しさを歌っていますので、悠々自適に暮らしていたようです。この文人はそれまで女性が文学を嗜むことがあまり良く思われていなかったことに目をつけ、婦女文学を提唱して女性の弟子を多く集めて詩を教えたことで収入には事欠かず、さらには美食にも耽溺して「女弟子詩選」「随園食単」という本まで刊行し、放蕩の詩人と呼ばれたそうです。もちろん世の男性たちからは不評で、風紀を乱す者と糾弾されていますが、実に羨ましい限りの隠退生活です。

逆のパターンとして、現代では長生きになったこともあり、壮年期までにお金も異性関係も十分に満たされてから、後期高齢者で世界一の大国のリーダーになっている人もいますので、人生のパスはお上の指導にもあるように、個別性に配慮しなければならないのでしょう。